

月例研究会（2024年12月25日）

国民的建築学から「まもる会」へ

——都市計画学者・西山卯三の高度成長期

鈴木 健吾

報告者は戦後日本の文化財保存運動の歴史的研究を志し、博士学位論文にまとめることを目指している。保存運動団体の来歴について、あるいは運動に参加した歴史家や考古学者など様々な手法を試みているが、本報告においては京都大学工学部の建築学者・都市工学者の西山卯三（1911-1994）について報告した。戦時期の「食寝分離論」をはじめ戦後の団地設計などで知られる西山であるが、高度経済成長期に多くの都市計画を受注する中で、開発を推進する側でありながら、文化財保存や景観保存の運動を仕掛ける側ともなった。その言論の分析は、西山個人の伝記的研究のみならず社会運動史の研究などにも裨益しよう。

報告では、まず、西山の個人アーカイブである「西山卯三記念すまい・まちづくり文庫」や広原盛明『評伝・西山卯三——20世紀の「すまい」を創った建築家』（京都大学学術出版会、2023年）など西山についての資料状況・先行研究について説明したのち、戦前の建築運動から住宅営団への参加、戦後の京都大学職員組合発足への参与など西山の来歴について述べた。戦時期の国家総動員に積極的な姿勢で関わった一方、早い段階から大阪の職工調査に関わっていった西山は戦後の民家調査などを通じて「国民的建築学」に関わる運動を牽引する一人になっていった。

しかし、戦後初期の文化運動の常として国民的建築学は「挫折」を経験し、一方、1955年

の日本住宅公団の発足に合わせ西山とその研究室は大型団地の設計計画を受注するようになっていく。そのさなか1962年に京都府城陽地域で古墳の保存に関する問題が発生、元来建築史などではなく都市計画系の専門家であった西山が文化財の問題に取り組む契機となった。関西圏の都市圏で文化財保存運動が流行する中、西山は京都タワー反対運動などに取り組んでいく。一方西山の代表的な都市計画「京都計画」（1964年）は文化財を現状のまま保存する「凍結的」な保存を批判し「開発的保存」を提言する。しかし、同時代のマイカー批判の影響を強く受けた稠密すぎる都市計画は批判を受け、大阪万博の会場設計においてはライバルと目される丹下健三に敗北、新全総批判の文脈などとも相まって西山自身は国家レベルの計画行政にはむしろ批判者となり、文化財保存全国協議会が発足（1970年）するなど文化財に関わる運動が盛り上がりを迎える中、住民運動家としての側面を増していく。西山が国立大学退職を迎える70年代に展開された京都市電をまもる会などへの思想・運動面の継続性を示唆しつつ、報告を終えた。

質疑においては題目から丹下健三ら同時代的人物との比較の成否まで多様な論点が提起された。「開発的保存」の高度成長期における独自性などについての説明不足を憾みとするとともに、西山が本来モノ資料の専門家ではないことによる特異性、本報告では中心的題目にはなかった時期も含めて西山の思想の「貫戦史」的な連続性をとらえる必要性などの諸論点について示唆を受けた。

以上のような報告・質疑を通じ、報告者自身も自身の分析の視野を広げ、研究を顧みる好機となった。拙い報告に対し、運営にご協力いただいた方、質疑などでご教示いただいた方に深くお礼申し上げ、研究の完成に邁進したい。（すずき・けんご 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）